

＜思いこみ その2＞

「英語と日本語を同じように伸ばすのが理想的」

英語で話しているときには、日本語の力がどうであろうと問題ではありません。日本語で文を書くときには、英語の力は関係ありません。英語の力がどれだけあるのか、日本語がどれだけできるのかにはそれぞれ意味がありますが、二つの力が「同じ」であるかどうかということには、何らかの意味があるとは思えません

私たちの経験から言えば、二つの言語を使う力が「同じくらい」というときには、「どちらも同じように十分でない」という場合が多いのです。(いわゆる「セミリングル」という状態です。)

言語は、コミュニケーションの道具であると同時に思考の道具でもあります。この点で言えば、何語であっても、一番得意な言語の力がどれだけあるかということがポイントになります。難しいことからは、得意な言葉で考えればいいのですから、二つ目の言語の力がどうであろうとそれは大きな問題ではありません。一つ目の言葉で考えたことを二つ目の言葉で表現しようとすれば、それは二つ目の言葉の力を伸ばすことにもつながります。ですから、二つの言語を学ぶ環境として、一つ目の力が優れているために二つの言語の力に差があるという状態は、むしろ好ましいことなのです。

日本国内で「英語も日本語と同じようにできるようにしたい」という場合、「日本語の力はすでに十分についている」という暗黙の前提があります。日本語の力が十分に高い人であれば、「英語も同じように」という目標を持つことは間違いではありません。しかし、日本語の力もけって十分とは言えない子どもたちの場合に「同じように」ということを目標にするのはたいへん危険です。海外で生活する子どもたちの場合は、特に注意が必要です。英語の力は英語の力、日本語の力は日本語の力として、それぞれに考えていかなければなりません。

編集長から一言

言語習得で、海外の親がおちいり易い3つの「思い込み」の指摘です。

わかりやすい言葉での指摘ですが、日本で、アメリカで、さらに日本でと、長年にわたって

子ども達や親と接してきた佐々先生の体験がにじみ出ています。

「一石二鳥の学習場面が意外にある」という先生の真意を読み取ってください。二つの言葉での学習が、それぞれの言葉の習得に相互に助けとなるのです。この先生の言葉を信じ、二つの言葉のハザマで頑張っている子どもをサポートしましょう。



日本語を学ぶアメリカの子ども (バージニア州)

＜思いこみ その3＞

「英語をとるか、日本語をとるか」

日本の小学校で英語の指導をするべきかどうかという場合、「まず日本語をきちんとできるようにしてから英語を教えるべきだ」という意見もあります。この背景には英語を学習することが日本語の学習の妨げになるという考え方があります。これも正しくありません。仮に、英語の学習に力を入れたために日本語が期待通りに伸びないということがあったとしたら、それは、英語を「勉強した」からではなくて、そのためにエネルギーをとられて日本語を十分に「勉強しなかった」からです。二つ目の言葉を学習することは、一つ目の言葉を別の角度から見る機会を与えることにもなり、一つ目の言葉の学習にもいい影響を与えることとなります。

文章を書くときの組み立て方、読み取るときの技術など、英語にも日本語にも通用する学習もあります。日本語が得意な生徒が、英語で書くレポートの下書きを日本語で書いたとすれば、それは日本語を学習していることにもなります。英語を勉強することが日本語の力を伸ばすことにつながり、日本語を学ぶことが英語の学習にも役立つということは十分に起こりうるのです。日本人の家族がアメリカで暮らす場合、二つの言語を使う必要性があるのですから、一石二鳥の学習場面は意外にたくさんあるのではないのでしょうか。

☆☆☆

日本国内では、学力低下、先生のストレスなど、暗い話題の多い2004年でした。海外にいる子どもたちのほつらつとした姿が、日本の子どもたち、大人たちに元気を与えてくれる2005年になることを期待したいと思います。